

人の心に届くメッセージ力とは？

スローガンよりメッセージが欲しい

「地域活性化」——「エリア・リバイタライゼーション」。筆者も、かつて、この言葉を看板にした活動をしてきた。いまでも続けているが、この言葉も慢性化している。最近では「地域持続可能性」と言ったり、SDGsを添えたりする。何かしらの協働感や共感が生まれやすい。言葉にも、流行(はやり)がある証である。

「所得倍増計画」は、その成果とともに残されている。それは、知親しみが深い日本人には違和感のない人が多いだろう。しかし、お題目を上手に考え出し、使い始めることが大事となる。日本人は、做って使うのは得意という国民性がある。先週は東京都議会選挙があった。続いて衆議院議員選挙もあるが、選挙ではスローガンとしてのお題目が掲げられる。

「コロナ禍の中、大雨・土石流があった。続いて複合災害となっている。不安な気持ちの中でオリンピック&パラリンピックが続く。変容するコロナの時代、国民に元気を与え、心を一つにするメッセージが欲しい。世間にならよつな、名文句

地元力発見!

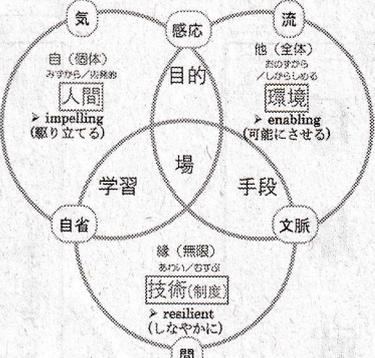
佐藤建吉 「洗楓座」代表

19 コタマする合言葉となるよつな、名文句

備えたい3つの視点—— 虫の眼、魚の眼、鳥の眼

いま、俳句がブームだという。実は、筆者が参加している読書会&文学の会で学んだことだが、俳句では観念的なことではなく、実体験の情景描写が第一という。その世界では、「現場証明」というらしいが、現実目に映った「出来事」の日記が、俳句の原点といふことである。保険の世界では「ウリ」の名人がいた。自身も名人であるが自覚して「まちの縁側育み隊」というNPOを組織し、その連鎖を創り出した。絵本や物語風に語り、協働を引き出し繋ぐ名人であった。ウキペディアでは、「まち育て」の研究と実践、人材育成のほかに、各地で「幻燈会」を開いて啓蒙に努め、自称「まち育ての語り部」と書かれている通りである。しかし、残念ながら、2018年2月にすい臓がんで急逝した。

延藤氏は、目線も多面的であった。虫の目(地面の眼)、魚の目(流れを見る眼)、鳥の目(上空からの眼)。この



延藤安弘氏の実践政策学の基本構図

情感と感動を生む句作は、鍛錬によって可能になるという。地域活性化は、地域という場所が対象であり、そこに住む人々に問いかけられ、同時に人々が語るべきことが望ましい。結果として、人々に言葉だけでなく行動が生まれる。すると、「関係人口」という部外者との交流や経済のつながりが生まれる。感動は、もはや時間や場所を同じくしなくとも共通することになる。感動の連鎖が生まれれば持続可能となる。

筆者の先輩に、延藤安弘(千葉大学大学院、都市環境システムコース・元教授)という感動づくりの名人がいた。自身も名人であるが自覚して「まちの縁側育み隊」というNPOを組織し、その連鎖を創り出した。絵本や物語風に語り、協働を引き出し繋ぐ名人であった。ウキペディアでは、「まち育て」の研究と実践、人材育成のほかに、各地で「幻燈会」を開いて啓蒙に努め、自称「まち育ての語り部」と書かれている通りである。しかし、残念ながら、2018年2月にすい臓がんで急逝した。

私たちは、日本の中のある地域に居を持ってはいるが、前述の3つの目線で、世の動きを感じることが出来る。コロナ禍で人々の交流が制限されているが、いまの時代、SNSやグーグルマップを使うと、世界の地域の変化を確かめ、その地元の特質も発見することが出来る。メッセージはチャンス。なのだから。

1950年山形生まれ。東京都立大院卒。元千葉大学大学院工学研究科准教授(金属疲労専攻)。金属疲労の研究のほか、他分野のテーマの研究開発に努めるとともに日本各地の地域おこし活動に従事する。ローカル鉄道と地元の酒蔵のコラボで地域再生を図る地酒「鐵の道」の製造・販売を企画、すでに10件を超える銘柄を送り出している。一般社団法人「洗楓座」代表。「全国ふるさと大使連絡会議」理事

延藤氏は、目線も多面的であった。虫の目(地面の眼)、魚の目(流れを見る眼)、鳥の目(上空からの眼)。この

総合